



医師 15 年目での英語論文デビュー

☆推薦文：CRST の輪をつなぐ☆

還暦を過ぎても、面と向かってお礼を言われたり、褒められたりすると、舞い上がってしまう。褒められることが減多にない。

伊田勉先生は、東京の島嶼僻地勤務後に都立病院産婦人科で勤務されている。先生は、今回英文ペーパーを2つものにした。意義深い内容で、この分野で長く引用されるだろう。わずかだが、CRST 全体、藤原先生（産婦人科）、それに私が論文化のお手伝いができて happy である。彼が、direct に喜びを表現してくださって、2重に happy である。

論文は簡単には書けない。が、全力を投入して、必死に医療に取り組んでいる「普通の（天才ではない）」臨床医が、その経験・知恵・感慨・思想を医学世界へ残したいならば、論文を書いておくしかない。この世界で誠実に生きた証を残すには、良い論文を書いて、それを医学世界に刻印しておくのが、結局は一番早い。

CRST 依頼に対しては、実は自分の仕事を放擲して、できる限りをしてきた。A man of action であることを自分に課してきた。が、私の現役 writer 人生も残りわずかだ。しかし、ここには仲間が沢山いる。CRST から援護射撃を受けた先生は、将来きっと CRST を応援してくれるだろう。CRST が永続し、happy ring がつながっていくと信じている。

CRST 代表 松原茂樹（産婦人科教授、附属病院副院長、東京都 2 期生）

東京都立多摩総合医療センター 産婦人科 伊田 勉（東京都 23 期卒業）

Tsutomu Ida, Takahiro Goto, Toru Motoi, Ichiro Nagai, Shigeki Matsubara, Hiroyuki Fujiwara, Akira Kohyama. Surgical removal of an isolated femoral metastasis of uterine cervical squamous cell carcinoma: A case report and review of the literature-: *European Journal of Gynaecological Oncology* (in press)

Tsutomu Ida, Hiroyuki Fujiwara, Shigeki Matsubara, Yoshimi Taniguchi, Akira Kohyama. Salpingectomy for tubal sterilization at cesarean section: No extra time and no extra bleeding compared with tubal ligation: *Clinical and Experimental Obstetrics & Gynecology* (in press)

東京都 23 期の伊田と申します。この度 CRST の先生方にご指導をいただき、英語論文 2 編の accept を得ました。今更お恥ずかしい限りですが、私の様な立場の方にご参考になればと思い、少しだけ今回の経験をご紹介します。ご紹介します。

まず論文の内容について簡単にご紹介します。1 編目は症例報告です。33 歳の子宮頸癌 IB1 期症例において発症した単発の大腿骨再発に対して、外科的切除のみで無病生存を維持できているというものです。子宮頸癌の骨転移には、放射線治療が選択される事が多く、外科的切除の報告は稀で、切除による腫瘍制御の可能性に言及したものはありませんでした。本症例では、単発の四肢骨転移に対する外科的切除が、症状のみならず腫瘍の制御にも有用である可能性を示唆しました。

2 編目は、帝王切開時不妊手術としての両側卵管摘出術の周術期予後が、従来法である卵管結紮術と比較して差が無いことを示した後方視的研究です。近年、卵管遠位部は卵巣漿液性腺癌の発生母地と考えられるようになってきており、2015 年以降、子宮摘出や不妊手術時には予防的に卵管を摘出することが世界的に勧められるようになりました。しかしながら、帝王切開時の卵管摘出術については、子宮周囲の血流増加による手術の困難さが心配されることや、おそらく産科と婦人科の境界領域になることも影響してか、まだ報告されていませんでした。当院では 2015 年から帝王切開時の卵管摘出術を導入し、その周術期予後が同等であることを歴史的対照と比較検討して報告しました。



さて、ここからは今回の論文に至る経緯についてお話します。実は、今回のご指導の以前から自治医大の先生方に導いていただいていた。お分かりのように以前の私は学術活動に熱心ではなく、学会や論文発表は上司から指示された時にやるものか、専門医取得のためのノルマ程度に考えていました。転帰は2011年に札幌で行われた日本周産期新生児学会でした。今でもはっきりと覚えています。書店コーナーで「臨床研究と論文作成のコツ」を見つけ、大先輩方が書かれた本に何となく興味を引かれ買って帰りました。松原教授の書かれたその序文に、医療者の責務の一つとして「診療経験を個人の財産や個人芸として独占せず、世の中に広く知らしめること」とあり、大変感銘を受けたのです。その当時、癌の看取りにおいて次の様な消化できない悩みがありました。「亡くなった患者さんに報いるためも、その経験を次に生かそう・・・しかし、自分が経験を生かす程度のこと、亡くなった患者さんや家族を納得させるほどの価値があるのだろうか?」。少し意味は違うかも知れませんが、松原教授のお言葉を受けて、患者さんや自分の経験を広く役立つ形で残すことも主治医に残された仕事と考えるようになり、それが学術活動へ向かう原動力となりました。とはいえ、自分でできたことは学会発表とわずかな和文論文でしたが。

そんな中経験した子宮頸癌の症例は、若年の早期癌が再発してしまったことや再発時の診断の遅れなどがあり、大変ショックを受けた症例でした。主治医の責務として、広く利用されうる様に英文で残さなければならぬと考えましたが、全く要領が分かりません。CRSTについては以前聞いていたのですが、私の立場でも支援を受けられるのかどうか、大先輩である松原教授に失礼ではないか、恐る恐るご相談のメールを送りました。事務局の亀崎教授からはすぐに詳細を送るようにお返事をいただき、その後あっという間に松原教授から直接のお返事を頂戴しました。藤原教授には素人の私に対して大変ご丁寧なご指導を頂き、約半年後3誌目でacceptを得ました。大変ほっとしました。2編目については、当初は学会発表用にまとめたものでした。私としては面白い内容かと思ったのですが、最終日のポスターセッションの最後の演題となり、ややがっかりして臨みました。当日、偶然その場に松原教授がいらっしゃり、貴重なご意見と論文化のお勧めをいただきました。まず和文で原案を書き、図々しくも松原教授にお送りしたところ、またしてもすぐにお返事をいただき、藤原教授、大口教授からもご助言をいただきました。当初自力で英文化し投稿したのですが、2誌にrejectをもらったため以後正式なCRST支援としていただきました。松原教授、藤原教授に再度ご指導いただき、学会から10ヶ月後5誌目にしてacceptを得ることができました。大変なご多忙の中、貴重なご指導をいただいたことに、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

今後の目標は、今回与えていただいた貴重な経験を個人の財産として独占せず、論文作成の意義や方法を当院の若い医師に知らしめることです。何となく論文作成のコツが分かるようになるまで20編とすると、わずかながらの指導ができるようになるまでには10年ぐらいかかるでしょうか。医師人生中盤の目標を与えていただいたことに深く感謝し、今後も研鑽して参りたいと思います。



!! 地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集 !!

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先:地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>